

小説同人誌評 41

長篇の魅力、 ふたたび

細見和之

ロシアのウクライナ侵攻も、イスラエルのガザ地区にたいする攻撃も、収束の見通しがたないままだにいたる。日本のマスコミでは、もう飽きただろうとばかり、報道の頻度も落ちてしまった。知り合いの岡真理さんが著書『ガザとは何か——パレスチナを知るための緊急講義』（大和書房）のなかで引いている、「イスラーム中世の神秘主義の思想家」というマンストール・アルハッラージュの言葉が胸に響く。

地獄とは、人々が苦しんでいるところのことではない。／人が苦しんでいるのを誰も見ようとしないところのことだ。

さて、今回は長篇に印象深い作品が多かった。その代表は、『イクネア』第11号掲載の、岩代明子「一番暗い時間に、彼女は耳をすます」。長篇も長篇、四〇〇字詰め換算で、四一

〇枚を超えて、優に単行本一冊分である（以下、「四〇〇字詰め換算で」は省略）。

雑誌の「後記」のなかで作者自身記しているとおり、以前に『MON』に発表していた作品を下敷きにして大きく膨らませたもので。以前は、三七歳の「私」と二歳下の弟「時男」を軸にした印象深い短篇だった。

前作同様、「私」と時男は母と父が離婚するまえに自宅のポストに届いていた封筒をめくってたがいにトラウマに近い記憶を抱えている。宛名も差し出し人の名前もないその封筒には「あなたの夫は私を愛している」の言葉とともに、父親と見知らぬ女性が裸で抱き合っている写真が何枚も収められていたのである。それを最初に見つけたのは時男で、そのまま封筒をポストに戻した。その後「私」がその封筒に気づき、愕然として廃棄する。以来、「私」は結婚に踏み切れない。時男は姉が結婚しないのはその封筒のせいと、自分が先に処分すればよかったと思っているのだった。父親のこの不倫問題と、今回の作品では二つの恋愛が対置されている。

一つは、社内でのセクハラ問題。上司と不倫関係にあった女性が退職後、その上司と会社をセクハラで訴えたのである。「私」はその問題を深く調査する役割を担われる。この部分はミステリー仕立てのような展開で、どうやら二人はほんとうの不倫関係にあったよ

うだ。「私」は訴えた女性のいけばん望んでいることは、あれはセクハラではなく純粋な恋愛だったですね、という確認ではなかったかと推測する。

もう一つは、最近「私」が引越したあと通いはじめたピアノ教室の店長「柴崎」との関係。こちらはいい意味でも、どかしいほどの純愛劇となっている。さまざまな音楽とコンサートの模様、それにラインでのやり取りが巧みに取り入れられている。のちに柴崎は「私」よりも年下ということも判明するのだが、とにかく、たがいに「好き、嫌い」と花占いでもし続けているような関係なのだ。

さらに、「私」が長いあいだ会っていないかった父親と再会する場面も最後には登場する。父は末期癌で入院していて、わずかな言葉しか交わせない。面会の際の父親の最後の言葉は「好きにせえや」である。和解とはとうてい言えないが、「私」はあの封筒以来のトラウマをようやく乗り越えられそうだと。

一つ一つの物語を別の短篇、中篇として描くほうがすっきりするところがあるが、敢えて大長篇として書き上げた作者にここは拍手を送りたい。

ただし、前作でどうだったか記憶にないが、今回の作品では問題の封筒を「私」と時男が見たのがともに「高二の夏休み」となっている。「私」が見たのが「高二の夏休み」なら時

男が見たのは「中三の夏休み」のはずではないかと思う。

『水晶群』第86号掲載の、杉本増生「地に二人」は、七二歳の兄と六二歳の妹「里子」との息の合った関係を、兄である「私」の視点で、一〇枚近くの作品として描いている。冒頭、その兄と妹が「省ちゃん」を見舞いにゆくところから始まる。「省ちゃん」こと省三は、二人の叔父にあたるのだが、ほとんど身よりのないまま末期癌で死を迎えつつあるのである。

省三は自分の兄弟に疎まれたまま、ひとり暮らしを続けていたようだが、まだ生きている親戚縁者のなかで、かろうじて省三のことを懐かしく記憶にとどめているのは、「私」と里子のみである。二人の母親で省三の姉に相当する好恵の婚家に、省三が居候していた時期があるからである。とはいえ、二人にとってもそれはずいぶん昔のことであり、省三が末期癌の状態で入院したとき、生活保護担当者が最初に連絡してきたのは、省三のことをまったく知らない叔母のもだった。その省三を里子と二人でどのように看取り、さらには葬儀と納骨をどう手配するか…。

医療の発達と人間関係の希薄化のなかで、私たちがますます直面しそうな事態に、その都度どう納得して対処してゆけるか、考えさせられる作品だ。

『VIKING』第87号と878号に掲載されている、直木美穂子「彼はベクトウ山を見たか(2)」と「同、(3・完結)」は、合わせて二〇〇枚の作品。(1)がいま私の手元にはないが、おそらくこれも合わせるなら二五〇枚ということになるかと思う。今回読んだなかで二番目の長篇である。

主人公「谷崎美和子」の生涯が、幼少期から大学二年まで、美和子の視点で描かれている。美和子の大学受験がちょうど東大の安田講堂占拠があった年なので、典型的な団塊世代。美和子は大学教授の父親と、進学高の教師をしている母親のもと、なに不自由なく暮らしているようで、じつは母親のプレッシャーが大きい。受験というのはこんなたいへんなものだったかとあらためて思う。

本来軸になるのは、作品タイトルとも関わって、小学校からの同級生でいちばんの秀才だった「徳永叡俊」との関係である。徳永は父親が朝鮮人、母親が日本人で、あるときから「金叡俊」という本名を名乗り、朝鮮高校へ進学し、母の死後、最終的には父親とともに北朝鮮に「帰国」するのである。

叡俊は朝鮮高校へ入ってからもときおり美和子のもとを訪れている。北朝鮮へ帰国するまえもそうだ。そこには美和子にたいする叡俊ほのかな愛を感じることができるとは、美和子は叡俊が体現しようとする民族的正義

にも、大学での全共闘の運動にも違和感を覚えずにいられない。こういう感覚を掘り起こしてゆくことは大事だろう。それにしても、叡俊が北朝鮮に帰国したところで作品がいささか唐突に終わっているのが残念だ。

今回届いている『VIKING』にはほかにも力作が並んでいる。いちばんの秀作は同誌第79号掲載の、梶野吉郎「つづる時と佛」と。兄「良平」の視点で、一二歳下の弟「昭三」の姿を、九〇枚近くの作品で描いている。

昭三は本来、良平が継ぐべき家業の農家を引き継いだ。しかも、アメリカへ赴いて、畜産業を身につけて、昭三は病で不意に亡くなってしまふ。やがて昭三は病で不意に亡くなってしまふ。三六歳の若さだった。良平はその死に目に会おうとしなかったことに、後悔の念を抱えている。やがて牧畜業は途絶え、家族も四散することになる。

この作品ではこのような経緯が良平と昭三の対話を軸に描かれているのだが、後半になってすでに昭三が亡くなっていることを読者は知ることになる。つまり、良平と昭三の対話として記されてきたことは、じつはすべて良平の自己内対話であったのだ。無駄のない端正な文章と相俟って、これぞレクイエム(鎮魂)と呼ぶべき一篇である。

一方、同誌第87号掲載の、光尾鷹「四角い花」はいわゆる問題作。佐々木理花という謎

めいた若い女性と三人の男の關係が、八三枚ほどで描かれている。

一人目、大学院生「北川星矢」は、深夜のコンビニで傷だらけの体で酒を飲んでる若い女性にひと目惚れし、口説き落として一夜を明かす。それが佐々木理花だった。彼女との同棲生活がしばらく続くが、理花は不意に姿を消す。

二人目は「修平」。三〇歳過ぎで「殴られ屋」をしている。しかし、ある夜、若い女性から自分を殴るように言われる。「殴られ屋」が「殴り屋」になるのである。修平はその女を力いっぱい殴り倒す。どうやら星矢が理花を見つけたのはその直後のようだ。何ヶ月かあと、修平がふたたびその女に出会うと、女は今度は殴らせてほしいと言う。さらに女は薬をオードーズして自分は間もなく死ぬと告げる。そして実際に死んでしまう。

最後は「直治（なおい）」。理花より二〇歳上で、マスコミにもよく登場する起業家。直治も理花にひと目惚れして結婚までするが、その際両親から理花がうつ病だと聞かされていた。理花は直治に従順であるようについて、ときおり朝帰りのことが許せず、とうとう修平に殴られるように仕向けたのだった。しかし、じつは朝帰りのとき、理花は、葉のオードーズの誘惑を押さえるために、親元に戻っていただけだった。

こうして、謎めいた理花の背後にあったのは「うつ病」と次第に謎解きが進んでゆく展開なのだが、正直、作品の結構としては盛りが悪い。なぜ理花は直治に事情をきちんと告げていなかったのか、作中でどうしてこうまで暴力が繰り返されるのか。しかし、不思議に読ませる作品である。

『R&W』第35号掲載の、小路望海「あげたくない」は、若い夫婦の關係が微妙なズレから一気に日常の破綻にまでいたる様子を、九五枚近くで緊迫感をもって描いている。

ある朝、「私」が朝食の準備をしているとテレビで洪水のニュースばかりが流されている。「私」がいささかうんざりしているのにたいして夫の顔は画面に釘付けになっている。洪水の現場は、夫が小学生のころ過ごしていた地域らしい。その日、帰宅した夫は義援金を一〇万円送金したという。そのあたりから、「私」は夫の価値観、貨幣感覚との違いを意識しはじめ。さらに夫は募金に関心をもち、ユニセフのこともなどを持ち出し、「私」は違和感を取らうかなどと考える。

北陸で大きな震災が起こったとき、夫は無給のボランティアに行くとも言い出し、夜眠れなかった「私」は明けがたにホテルへ家出する。「私」が一泊二万円のデラックスルームに宿泊していると、株で失敗した母親から緊

急に二、三百万円の送金を求められる。翌日「私」は自分の貯金をはたいて三百万円を母親の口座に振り込む。ほとんど手持ちのお金がなくなつたところで、「私」は自らの失態でクレジットカードが使えなくなり、ホテルからほうほうの態で逃げてゆく……。

美容整形で取るつもりにもなっていたイボがどんどん大きくなつたりするところから、途中からは「私」の妄想ないし夢という設定なのかもしれないが、それこそ妄想に近いような現実を私たち自身が現に生きている、という空恐ろしさが感じられる。

『せる』第125号掲載の、津木林洋「チャットキヤット」は、いま話題のAIロボットの題材に一〇五枚超で描いている。

ある日、アメリカにいる父から「僕」に荷物が届けられる。中には、猫のAIロボットが入っていて、施設に入っている祖母「光子」に届けるように言われる。祖母が飼っていた「ピーコ」という猫に合わせて作られたロボットだった。験しに電源を入れてみると、ニャアと鳴いて猫のように体を動かすだけでなく、AIを搭載しているので対話ができるのだった。「僕」はそのロボットを祖母のもとに届ける。

最初はそつけなかった光子だが、ピーコは巧みに光子とコミュニケーションを取り、自分の誕生日のお祝い会でピアノを弾きたいと

いう気持ちにまでさせる。光子とその娘、つまり「僕」の母、「僕」にいたるまで、ピアノ一家なのだった。母親の「朋美」は二〇〇一年の貿易センタービルへのテロに捲き込まれて「僕」が三歳のときに亡くなっていた。しかし、認知症のはじまっていく光子は、娘が亡くなった記憶も失くしているようだ。そして、光子の誕生日祝いでは、光子と「僕」のほかに、A Iロボットが作成した朋美もオンラインで登場することになる…。

A Iについては不安視する声も聞かれるが、ここではA Iロボットをつうじた明るい近未来の光景が丹念に描かれている。A Iロボットの活躍ぶりをリアルに読ませる、作者の周到な手際に感心せざるを得ない。

同誌掲載の、西村郁子「石を旅する」は、石あるいは岩、岩石というものの魅力に気づかせてくれる、九八枚近くの力作。

主人公の「宮川佐也子」は職場に向かう朝のバスで、先に下りた女性の乗客が黒いトートバッグを忘れているのに気づき、わざわざバスを下りてそれを相手に手渡す。しかし、その女の反応はいささか不可解である。

二カ月後、同じバスで佐也子は女性から声をかけられる。あのとときの女だった。彼女は「富永奏（トミナガカナデ）」と名乗り、「石を旅する」という写真集を差し出す。あのとときのトートバッグに入っていたのは、その本

の最終校正と写真だったという。それから、佐也子は日本中の巨石を収めたその写真集に魅せられ、休日には、紹介されている近くの巨石を実際に見つめる旅にまで出るようになる。石と会話するという富永の文章の言葉にも惹かれ、佐也子自身、石の声を聴こうとする…。

この作品では、佐也子が昼間勤めているホテルでのベッドメイキングの仕事、夜に働いている居酒屋の場面、それに、佐也子が抱えている、かつて結婚していたときに出産した子どもが二時間で死亡し、その後、子どもを積極的に産もうとしなかった思い出など、さまざまな要素が組み込まれているが、写真集に導かれて、佐也子がいま見える岩石の姿、存在感が傑出している。

『あるかいど』第76号では、渡谷邦「Aハウスにて」を印象深く読んだ。七〇枚あまりの作品なのだが、相変わらず一筋縄ではゆかない謎に満ちている。

「油野」という男が「ハルコ」のアパートにちよくちよくやって来て、シヨッピンゲモールへ二人で出かけたとき、油野は前の妻が出ていった経緯を語る。妻は出て行く前に二階の階段のところに自在扉のついた壁を設置していたという。やがてハルコは油野の家で暮らすようになるのだが、二人の関係はよく分からないままだ。

油野の家には前の妻である「キヨコ」の気配が濃密に存在しているようで、それは奇妙な腐敗臭としても家のなかに漂っている。あるときハルコは隣家の斎藤の妻から、キヨコがまだ近辺にいないことを教えられる。パン屋の奥のカフェで働いているという、キヨコのもとをハルコは訪れてみる。さらにハルコはキヨコのことをつけて、そのアパートまでも確かめる…。

嫉妬というよりも、人間が抱えている情念、あるいは生霊のような感覚とでも呼ばばいいだろうか、そういうものに付き纏われている作品世界である。キヨコは猫を飼っていたことにもなっていて、あの階段の壁はキヨコが猫そのものと化して潜っていたものではないか。タイトルの「Aハウス」はやはり「アニマル・ハウス」のことなのだろう。

作品の最後では、老人ホームの建設に関わっているダンブカーが油野の家の浴室をかすめて斎藤家のリビングに突っこむ。これも情念ないし生霊の仕業としか思えない。

今回、はじめてと記憶しているが、「農村民文学」という会員誌の第36号が届いている。表紙に「第67回農村民文学賞発表」とある。小説、詩、評論が対象となるようで、今回は小説で松田喜好「藁小屋」【冬の章】が、詩では、関西ではお馴染みの武西良和の詩集「メモの重し」が受賞ということである。ここでは松田

喜好の、六〇枚あまりの作品を紹介しておきたい。

時代は一九五〇年代半ばだろうか、雪に閉じ込められている冬の農家では、祖母も母も父も、藁草履を作る作業にひたすら従事している。その様子が小学校五年の「俺」の視点で描かれている。いくつもの工程をへて一足の藁草履が作られる過程、肉牛、乳牛、山羊の飼育、正月の餅つきの模様などが、じつに克明に描写されているのである。

「俺」の小学校五年という年齢もじつに微妙で、そういう家内労働にすこしずつ参画してゆく時期なのである。だからこそ、それまで漠然としてしか見えていなかった事柄が具体的に「俺」の得心の対象となつてゆく。これはもう一〇年もすれば、誰からも忘れられてしまうかもしれない世界である。

『米子文学』第81号掲載の、高橋亮「耳を澄ませば」は、いま紹介した松田作品よりも時代を遡つて、戦時中の日本の光景を、小学生四年の「良平」の視点で描いている、四〇枚弱の作品。

冒頭、良平は、供出のための米俵を積んで役場の倉庫に集つて来る、大八車の音に耳を澄ませている。良平は、大人の世界の欺瞞に気づくためにはたえず耳を澄ませておかねばならない、と考えている、利発な子どもなのである。同時に、自分の耳はこんなにいいの

に合唱からは音痴として外される、それが不満な良平でもあった。

作品の後半、大八車に耳を傾けていた良平のもとにトラックがやって来る。大八車の米俵を何台分も運べそうなトラックである。トラックには男が二人乗っているが、一人は助手で運転台の奥にいる。運転席の男から思わぬことに「乗ってみたいか」と声をかけられ、良平は助手席にあがる。しかし、運転席の男に良平はズボンを脱がされ、性的な暴行を受けることになる。しばらくして、その運転主が事故で死んだことを良平は聞かされる……

大八車による米の供出の場面もリアルに記憶している世代はすぐに後を絶つに違いない。『こみゆにてい』第119号掲載の、一乗谷かおり「竹藪のひと」は、現代の民話のような世界を三〇枚弱で描いている。

物語の大半は、一〇歳の「安子」の視点で、父「兼利」が自宅のすぐ近くの竹藪のなかの庵に妾として囲つていた「貴子」の姿を捉えている。娘の安子からすれば、貴子の存在自体が謎だが、母の「桑子」さえ、不快に思うことなく、貴子に食事を届けている。安子の弟で三歳の「兼昭」はしきりに貴子のもとへいきたがる。そのたびに安子は、兼昭を負ぶって浅い川をわたつてゆかねばならない。

そして、父の兼利が亡くなったとき、母の桑子は貴子を追い出すのではなく、逆に養子

として迎え入れるのである。貴子がどういう経緯で竹藪に暮らすことになったかはほんとうのところは不明だが、貴子は稀人、あるいは観音様のようにさえ思われる。

『別冊關學文藝』第68号掲載の、浅田厚美「早生まれクラブ」は、サークル活動をとおして、すこしずつ地域に溶け込んでゆく若い女性を描いた、軽快な八〇枚の作品。

「あたし」は夫の転勤に伴い、勤めていた職場もやめて、夫とともに新しい街に引っ越してきた。時間のたつぷりある「あたし」は、図書館のロビーで「早生まれクラブ」参加者募集」のチラシを見つけ、興味をもつ。早生まれ、つまり一月から三月（厳密には四月一日）までに生まれた者たちがそれぞれに背負つて来た生い立ち、たとえば、小学一年の段階で、四月生まれとはほぼ一年の遅れがあるにもかかわらず、同一の学年で過ごしたことから苦労などを語り合う場である。一方で早生まれには芸術家が多いなど、積極的な面もある。そんなことを共有しあう集まりである。私自身早生まれで、背く箇所も多い。

同時に「あたし」は、お年寄りがたがいにひどく気を遣いあつて暮らしていることも知つてゆく。地域の人間関係は同時に薄氷を踏むようなものなのだ。

それにしても、毎回アイディアに富んだ趣向を練り出す作者に脱帽である。